

今まで以上に一日を大切に 皆の笑顔と喜び増やしたい

東京・葛飾区にある私立修徳高等学校の吹奏楽部は現在、部員が38名。顧問の高津和恵先生は大学生の時から同校でクラリネットのコーチとして指導に携わり、正式に教員となった2004年から吹奏楽部顧問として熱心に指導。東京都高等学校吹奏楽コンクールでも度々入賞を果たしてきた。定期演奏会のほか、東日本大震災復興支援チャリティーコンサートといったボランティア活動や地域交流のため自ら主催する合同演奏にも取り組み、野球をはじめ活発な運動系クラブの応援も毎年の大きな活躍の場となっていた。

しかし今年はコロナ禍で状況が一変。



顧問 高津和恵 教諭

入部をお祝いするコンサートなど、新入生の前で演奏できる機会も失った。感染拡大に伴い3月から休校、6月上旬にようやく学年毎の分散登校が始まったが、登校できるのは週2回で、クラブ活動も同様。それ以外の日はオンライン授業が導入された。

「休校中は、家で練習できる環境がある生徒には学校の楽器を最寄り駅まで届けたりしたこともありましたが、全員で足並みを揃えた練習ができない以上、積極的に練習は行わない方を選択。それぞれが今やれること、部活動以外にも自分の将来の夢に向かってできることを考え、実践してもらおう期間に充てました。久しぶりに週2日の練習ができるようになった時には、生徒達は何か努力をしていたのか、私が想像していた以上に楽器の音が良く鳴っていました。とにかく音が出せたことが、とても嬉しかったようです。」

このような状況にもかかわらず、今年には新入部員が22名入部してくれました。休校や分散登校でなかなか友達を作る機会がなかった中で、学校生活が

楽しくなるよう、もしかしたら今以上に共通のやりたいことを見つけたい、繋がりたいという気持ちが強かったのかもしれない」と、高津先生。

8月に入ると、手の消毒、距離をとる、十分な換気といった基本的な感染防止策を徹底しながら少しずつ本格的な練習が始まった。ヤマハミュージックジャパンが発表した「管楽器・教育楽器の飛沫可視化実験」の動画も大いに参考になったという。

「特に金管のバズイング練習などには最大限の注意を払いつつ、一方で過敏になり過ぎると練習が暗く、つまらないものになってしまうので、状況を見ながら慎重に進めています。子ども達は短い練習時間や会話の制限など、本当に文句一つ言わずにきちんと守ってくれて、頭が下がります」

聴いてもらうことが力に

8月に部活動の保護者会の折、ようやくミニコンサートで3曲を披露することができた。全員の初心者メンバーも1フレーズは必ずソロを吹くようにするなど、久しぶりに自分の演奏を届けることができ、子ども達も張り切ってくれたという。さらに9月5日には定期演奏会である「ファミリコンサート」を大きなステージで、十分に距離を取った上で開催。さまざまな制限がある中でも、こうして少しずつ演

奏活動ができるようになってきた。10月と11月には同校が主催し、同じように演奏を発表する場を求めている8校、校内コンサートの映像をオンラインで発表する2校が参加して、「感謝を伝えるコンサート」を開催予定。コンサートの模様は映像として記録し、医療や福祉施設などに提供することも計画している。

「この自粛期間に、子ども達のために一生懸命頑張ってくれた人たちがたくさんいることを忘れてはなりません。今度は自分達が誰かの元気になるようなことができないか、それぞれの思い、感謝を伝える場になればと考えています。」

今までは当たり前だった日常が、こんなに貴重なものだったのかと生徒達も改めて思っているはず。今まで以上に一日一日の練習を大切にしています。やはり人間というのは、人と人が繋がって、相手の反応を得られることが力になるのだと実感します。これからも演奏を聴いてもらえる機会を大事にしていきたいなと思います」

日本管楽合奏コンテストや全日本ブラスシンフォニーコンクールなどの録画審査にもエントリー。個々の技術を上げ、演奏を完成させること、保護者や卒業生に自分達の演奏を見せたいことが今年の活動目標。年が明けたら、いよいよ楽器を響かせることに集中し、



向かい合うことがないよう、換気の良い窓際で練習



久しぶりの大きな舞台上、子ども達にも笑顔が溢れる



9月5日、三郷市民文化会館大ホールで開催された定期演奏会「ファミリーコンサート」。感染防止策を徹底しながら演奏を発表できた

来年度のコンクールや、春から始まる野球部の応援のための曲も準備したいと意欲を見せる。

「プロの演奏家を育てている場所ではないので、高校3年間の部活動の経験を何かしら将来に役立ててもらいたいという願いがあります。感謝を忘れず、笑顔には凄い力があること、また、人のために頑張れる人になって欲しい。吹奏楽の活動を通じて仲間と一緒に学んでいって欲しいですね。」

ちょうど休校中、母の日に部員達から笑顔一杯の動画が送られてきて、こういう繋がりが必要なんだと改めて感激しました。同じように、送別会もできず寂しい思いをしている卒業生に、一人一人のメッセージ動画を作成し送

ってみたところ、たいへん喜んでくれました。思うような練習ができなくても、そうしたことも心を繋ぐことができるんだ、ということ子ども達からも教わりました。

まだまだたいへんな状況の中ではありますが、少しずつ活動の幅も広がり、生徒達にとっては喜びも少しずつ増えていっているのではないのでしょうか。日々積み重ねていくしかないですし、そうした時間を生徒達と味わえることで、今までと違った充実感が得られている気がします」

さまざまな制限を強いられる中でも、新たな目標の下、生徒達と一緒に、笑顔と喜びを分かち合っていきたいと前向きに締め括ってくれた。(小野寺)